

平安仮名文芸の基層としての語り

——〈歌語り〉を包摂するもの——

緒言

作家による孤高の営為ではなく、互いに心を寄せ合い生まれる文芸を交流の文芸と述べておく。平安中期成立の『枕草子』のような才気と共感を尊ぶ交流の文芸の流れは決して細々としたものではないと考える。交流の動機としては、喜びもさることながら、日常での胸ふさがる思いや寂寥の体験が挙げられる。貴族女性達は「里」にはない「宮仕へ」の華やかさにひかれ、傍観者のままではいられず、主人・貴紳等にも促されて宮廷文化形成に参与する一方で、各々の孤独の体験を介して互いの心を支え合う結びつきを求めたのではなからうか。

ここで言う平安貴族の交流の文芸の基底に〈歌語り〉があるとする指摘がある。⁽²⁾しかし、「歌語り」という口承文芸の一ジャンルの存在を立証するため⁽³⁾の直接的根拠の提示は『紫式部集』の「あやしき歌語り」1例に過ぎず、「歌語り」が用例上「ありふれたこと」でも、『源氏物語』の随処に見られる⁽⁴⁾わけでもないことは看過できない。

(朱雀帝と光君) かたみにあはれと見たてまつり給。(中略)よろづの御物語、文の道のおぼつかなくおぼさる事なども問はせ給て、又すきずきしき歌語りなども、かたみに聞こえかはさせ給ついでに、かの齋院の下り給ひし日の事、かたちのおかしくおはせしなど語らせ給に、われもうちとけて、野の宮のあはれなりしあけぼのも、みな聞え出で給てけり。⁽⁴⁾

本稿では「歌語り」を親しく交わす右の『源氏物語』の例から、互いに心を通わせ語り合う語らいに関わる語群(この場面では「聞えかはさせ」⁽⁵⁾がそれである。)に

渡辺仁史

焦点を移し、個人間の親密さを表す「かたみに」⁽⁶⁾あるいは「同じ心に」といった意識と関連づけて、「歌語り」等の行為を広く成り立たせる情緒的基層の表現を提示する。それによって女房達が競い合うだけでなく、貴顕も含めて互いに共感を寄せ、折に触れて才気ある言動をも生み出す場としてのしめやかな語らいが『枕草子』を中心とする平安中期仮名文芸に通底している様相を俯瞰したい。

一

無常の世における心知れる人々が語らいを通して互いに心を慰め合う話が『大和物語』41段にある。

源大納言の君の御もとに、としこはつねにまゐりけり。曹司してすむ時もありけり。をかしき人にて、よろづのことをつねにいひかはしたまひけり。つれづれなる日、このおとど、としこ、またこのむすめ、姉にあたるあやつこといひてありけり。母に似て、心もをかしかりけり。また、このおとどのもとに、よぶこといふ人ありけり。それもものあはれ知りて、いと心をかしき人なりけり。これ四人つどひて、よろづの物語し、世の中のはかなきこと、世間のことあはれなるいひひて、かのおとどのよみたまひける。

いひつつも世ははかなきをかたみにはあはれといかで見えまし
とよみたまひければ、たれもたれも、返しはせで、集りてよよとなむ泣きける。

あやしかりけるものどもにこそはありけれ。⁽⁷⁾

常日頃親しい人々が顔を合わせたとき心の奥の「世の中」「世間」への頼みがたさが物隔てなき語らいの中で吐露される。「いひひて」は『伊勢物語』筒井筒の章段でも男女主人公に関わり使用されている言葉である。この対座は一般的な意味での互いの面目を重視し洗練された言葉を交わす社交とは異なっており、ここに集う」を

かし」き人々にとつて共有する「はかなき」思い、ふるまいはしめやかな語らいを成り立たせる上で欠かせない。三角洋一はこの章段を引用し

『枕草子』や『更級日記』にも、このような語らいに心を慰め、生きていく支えとしているさまを読み取ることができるし、もつとはつきりと、女流日記作者の日記する心は右のような物語の場に臨んだ語り手の心をかたどったものではないかと、あえていつてみたいと思う。⁽⁸⁾

と述べている。本稿も前掲の鈴木宏子の和泉式部和歌についての言及(注5参照)やこの三角洋一の見解に賛同する立場から『大和物語』以降の諸作品についても検討したい。

『蜻蛉日記』にも「語らふ」例は兼家と道綱母との和歌の贈答などに見られる。

月夜のころ、よからぬ物語して、あはれなるさまのことども語らひてもありしころ思ひ出でられて、ものしけれな、かく言はる。⁽⁹⁾

これは作品にいくつか記される兼家の情愛の深かったころの二人を顧みての道綱母の感慨の一つで、兼家との和歌の贈答が続く場面である。

一方、夫婦の仲とは異なるが『大齋院前の御集』に次のような心とむ営みが描かれている。

同じ月のいとおもしろく出づるに、誰かれ、いと待ち遠なりと言へば、あなたの里もと言へば、民部、夜深からではと言ふ。出でがてになど言ひ交して、かたみになむ、ものはをかしう言ふかしなど、たはぶれ言ふほどに月出でて、南面に民部出でて、いとあはれなりや、進の君は、これはこれを見給はぬか、あなあさましと言へば、何事かと問ひて出で来て、高欄に押しかかりて愛づるほどに、御前より

293 a月とともに出で居ぬるかな

とのたまはずれば、いととく、進

b物思ふ心も空に通ひつ⁽¹⁰⁾

もちろんこれらのようなどやかな語らいと異なり

「などで、官得はじめたる六位の笏に、職の御曹司の辰巳の隅の築土の板はせしぞ。さらば、西、東のをもせよかし」などいふことを言ひいでて、あじきな

きことどもを、(中略)など、よろづのことを言ひのしるを、「いで、あなかしかまし。今は言はじ。寝たまひね」と言ふ『枕草子』「などで、官得はじめたる六位の笏に」の章段129段)

のような喧しいおしゃべりや饒舌な話などもあるには違いないが、何か目的があつての伝達ではなく、事物を挙げ、互いの心を確かめ合う語らいのうちに互いが結びつき合う可能性を感じ取っているようである。宮廷文化の斬新な試みとして語らいを洗練させ、才気を競い談笑に至る人々の集い、賑わいが求められながら、他方から離れて、たとえば寺に籠る、祭を見物するなどという時に

なほ同じほどにて、一つ心に、をかしきことどもにきことどもさまさまに言ひあはせつべき人、かならず一人二人、あまたも誘はまほし。『枕草子』「正月に寺に籠りたるは」の章段116段)

と、親密な、時に心はずむ機知に富んだ集い、交流も望ましいとされる。また、「いみじう心づきなきもの」の章段117段ではそれと軌を一にして一人で見物する心境を訝る話が描かれている。

しかし、共感できる人がいつもそうだと清少納言が素朴に信じていたわけではない。これは決して見逃してはならない点である。

ありがたきもの。舅にほめらるる婿。また、姑に思はるる嫁の君。毛のよく抜くる銀の毛抜き。主そしらぬ従者。つゆの癖なき。かたち、心、有様すぐれ、世に経るほど、いささかの疵なき。同じ所に住む人の、かたみに恥ぢかはし、いささかのひまなく用意したりと思ふが、つひに見えぬこそ、難けれ。物語、集など書き写すに、本に墨つけぬ。よき草子などは、いみじう心して書けど、かならずこそきたなげになるめれ。男、女をば言はじ、女ども、契り深くてかたらふ人の、末まで仲よきこと、難し。『枕草子』「ありがたきもの」の章段72段)

それゆえにこそ同じ感慨を覚え、それを契機に心ゆくまで語り合えた時、互いに得心するのである。

二

右のような経験を含みながらもなお人々の語らいが止むことはない。語らいの契機は、はかなき世、心細き世であり、つれづれなるままに語り出されたりもする。

また、世の中の憂さ、つらさ、にくきことも折々の興趣も契機となる。年々変わる

ことなき月や花でさえ話題の機会を与えるものとなる。そして、そこにとどまることなく更に洗練された場面をもつくりあげる。

雪のいと高うはあらで、薄らかに降りたるなどは、いとこそをかしけれ。また、雪のいと高う降り積りたる夕暮より、端近う、同じ心なる人、二、三人ばかり、火桶を中に据えて物語などするほどに、暗うなりぬれど、こなたには火もともさぬに、おほかたの雪の光いと白う見えたるに、火箸して灰など掻きすさみて、あはれるもをかしきも言ひあはせたるこそ、をかしけれ。宵もや過ぎぬらむと思ふほどに、杳の音近う聞ゆれば、あやしと、見いだしたるに、時々、かやうのをりにおぼえなく見ゆる人なりけり。「今日の雪を、いかにと思ひやりきこえながら、なでふことに障りて、その所に暮しつる」など言ふ。「今日来む」などやうの筋をぞ言ふらむかし。昼ありつることどもなどうちはじめて、よろづのことを言ふ。円座ばかりさし出でたれど、片つ方の足は下ながらあるに、鐘の音なども聞ゆるまで、内にも外にも、この言ふことは、飽かずおぼゆる。明暮のほどに帰るとて、「雪、なにの山に満てり」と誦じたるは、いとをかしきものなり。女の限りしては、さも、え居明さざらましを、ただなるよりは、をかしう好きたる有様など言ひあはせたり。〔枕草子〕「雪のいと高うはあらで」の章段176段)

この章段は「雪のいと高う降りたるを」の章段284段と同様にしめやかに共感をもつて物語る女房たちの間に新たに男性が加わることで更なる展開の機微が生じ、場の雰囲気も引き立つところに眼目がある。火桶の周囲に集まった女房たちのしめやかで心やすらぐ語らいには人々を引きつける魅力があるのである。燃える炭火のほのかな明るさと背後の闇の中の雪のほの白い光が人々の心を打ち解かせ「をかし」と思わせる。加えて訪れた知己が去り際をわきまえて詩句を「誦じ」て立ち去るのを見送り、「同じ心なる」人々もその折の感興を「言ひあはせ」得心するのである。(炭火については283段、284段にも描かれる。)

先に語らひに言及したが、そのような意味で使用される鍵語「語らふ」「言ひあはす」「言ひあふ」「言ひかはす」「語りあはす」の用例を『枕草子』から引用し列挙する。これらは「あふ」「あはす」「かはす」等、いずれも双方向的な言葉による、縁のあり方に関わらず親密な者どうし(恋人の場合もある。)の濃やかな交流であることを示している。

語らふ

(清少納言)「なにか、さもかたらひたまふ。大弁見えは、うち捨てたてまつりてむものを」と言へば、いみじう笑ひて、(行成)「誰か、かかることをさへ言ひ知らせむ。それ『さなせそ』とかたらふなり」と、のたまふ。(中略)(行成)「仲よしなども人に言はる。かくかたらふとならば、なにか恥づる。見えなどもせよかし」と、のたまふ。〔枕草子〕「職の御曹司の西面の」の章段46段(則光)「歌詠ませたまへるか。さらに見はべらじ」とて、扇ぎ返して逃げて去ぬ。かうかたらひ、かたみに後見などするうちに、なにともなくすこし仲あしうなりたるころ、文おこせたり。〔枕草子〕「里にまかでたるに」の章段80段)

(行成)女のすこし我はと思ひたるは、歌詠みがましくぞある。さらぬこそ、かたらひよけれ。まるなどにさること言はむ人、かへりて無心ならむかし。〔枕草子〕「二月、宮の司に定考といふことすなる」の章段128段)

(齊信)「なか、まるを、まことに近くかたらひたまはぬ。さすがにくしと思ひたるにはあらずと知りたるを、いとあやしくなむおぼゆる。かばかり年ごろになりぬる得意の、うとくてやむはなし。殿上などに明暮なきをりもあらば、何ごとをか思ひ出でにせむ。」〔枕草子〕「故殿の御ために、月ごとの」の章段130段)

言ひあはす

返事書かむと言ひあはせ、かたらふどちは見せかはしなどするも、いとをかし。

〔枕草子〕「節は」の章段36段)

(行成)常に「女はおのれをよるこぶ者のために顔づくりす。士はおのれを知る者のために死ぬ」となむ言ひたる」と、言ひあはせたまひつつ、よう知りたまへり。「遠江の浜柳」と言ひかはしてあるに、若き人々は、ただ言ひに見苦しきことどもなどつくるはず言ふに、(女房)「この君こそ、うたて見えにくけれ。異人のやうに歌うたひ興じなどもせず、けすさまじ」など、そしる。〔枕草子〕

「職の御曹司の西面の立部のもとにて」の章段46段)

入らせたまひて後も、なほ、めでたきことどもなど、言ひあはせてあたるに〔枕草子〕「職の御曹司の西面の立部のもとにて」の章段46段)

げにと思ふに、いとわびしきを、言ひあはせなどするほどに、藤侍従、ありつる花に付けて、卯の花の薄様に書きたり。この歌おぼえず。(五月の御精進のほど)の章段95段)

まめごとなども言ひあはせてみたまへるに「裁多てこの君と称す」と誦じて、また集まり来たれば『枕草子』「五月ばかり、月もなう」の章段132段）
 人の上ども言ひあはせて、歌など語り聞かまに寝入りぬるこそ、をかしけれ。

『枕草子』「宮仕へ人の里なども」の章段174段）

ただなるよりは、をかしう好きたる有様など言ひあはせたり。（「雪のいと高うはあらで」の章段176段）

言ひあふ

さし集いて、かの日の装束、扇などのことを言ひあへるもあり、また、いどみ隠して『枕草子』「関白殿、二月二十一日に、法興院の積善寺といふ御堂にて」の章段263段）

言ひかはす

をかしきこと、とり立てて書くべきことならねど、とかく言ひかはすけしきどもは、にくからず。『枕草子』「七月ばかり、いみじう暑ければ、」の章段33段）

まことに皆酔ひて、女房どもの言ひかはすほど、かたみにをかしと思ひためり。

『枕草子』「淑景舎、春宮にまゐりたまふほどのことなど、」の章段100段）

まして、女も、ただに言ひかはすことは、ときこそと思ふほどに、あいなくひがこともあるぞかし。（歌）『枕草子』「心もとなきもの」の章段155段）

ものををり、もしは人と言ひかはしたる歌の、聞えて、打聞などに書き入れらる。みづからの上にはまだ知らぬことなれど、なほ思ひやるよ。『枕草子』

「うれしきもの」の章段261段）

語りあはす

宮仕へする人々の出で集りて、おのが君々の御こと、めできこえ、宮の内、殿ばらのことども、かたみに語りあはせたるを、その家主人にて聞くこそ、をかしけれ。家広く、きよげにて、わが親族はさらなり、うちかたらひなどする人も、宮仕へ人を、方々に据ゑてこそあらせまほしけれ。さべきをりは、一所に集り居て、物語し、人の詠みたりし歌、なにくれと語りあはせて、人の文など持て来るも、もろともに見、返事書き、また、むつまじう来る人もあるは、きよげにうちしつらひて、雨など降りてえ帰らぬもをかしうもてなし、まゐらむをりは、そのこと見入れ、思はむさまにして出だしたてなどせばや。よき人のおはしますありさまなどの、いとゆかしきこそ、けしからぬ心や。『枕草子』

「宮仕へする人々の出で集りて」の章段288段）

これらは場の演出を含めて概ね男女を問わず共感に基づく語らいというべきであろうか。ただし、日常の語らいのすべてがそうであるわけではない。中宮定子との交流は別格であろうが、他の人々とは平素はむしろすれ違いや誤解、不和の方が多いのかもしれない。そうであればこそ貴顕との輝かしい交流の挿話をも含めて右のような心通わす時を特筆することにもなるのである。清少納言も跋文で『枕草子』の一部について「つれづれなる里居のほどに書き集めたる」と述べていることを考慮すれば功名心のような単純な動機のみで『枕草子』を書いているわけではないと考えられる。

三

自己に沈潜しようとする内省的な文芸の担い手は人々のより広い繋がりよりもむしろ心から信頼できる人との交流を望む。作品において時に孤独を吐露するのはそうした心ゆく語らいの相手を見つけないのがやはり難しいからであろう。それでもなお人は心と同じくする相手を求めずにはいられない。物思いに沈みがちと一般に思われている紫式部でもそれは同様であろう。『紫式部日記』には

あさましく、あはれなりし人の語らひしあたりも、われもいかに面なく心浅きものと思ひ落とすらむと推し量るに、それさへいと恥づかしくて、えおとづれやらず。（80ページ⁽¹²⁾）

ただ、えさらずうち語らひ、少しも心とめて思ふ、こまやかにものを言ひ通ふ、さしあたりておのづからむつび語らふ人ばかりを、少しもなつかしく思ふぞ、ものはかなきや。大納言の君の、夜々は御前にいと近う臥し給ひつ、物語し給ひしけはひの恋しきも、なほ世にしたがひぬる心か。（81ページ）

という用例が、ある種自嘲的ではあるが、『枕草子』と同様に挙げられる。また、『紫式部日記』の次の例は身の上を嘆きつつも人との繋がりを断ち切れない自己を感じている。

年ごろつれづれに眺め明かし暮らしつつ、花鳥の色をも音をも、春秋に行き交ふ空のけしき、月の影、霜雪を見て、そのとき来にけりとばかり思ひわきつつ、「いかにやいかに」とばかり、行く末の心細さはやるかたなきものから、はか

なき物語などにつけてうち語らふ人、同じ心なるは、あはれに書きかはし、すこし
け遠き、便りどもを尋ねても言ひけるを、ただこれを様々にあへしらひ、そぞろご
とにつれづれをば慰めつつ、世にあるべき人かずとは思はずながら、さしあたりて、
恥づかし、いみじと思ひ知るかたばかり逃れたりしを、さも残ることなく思ひ知る
身の憂さかな。(79ページ)

この物思いに關わり以下の『源氏物語』の内、「早蕨」巻の例はこの『紫式部日
記』の例と同じ言葉が並ぶ。「花鳥の色をも声をも」「心細き」「うち語らふ」「同
じ心」「はかなき(こと)」「(言ひ)かはし」などが特徴的であり、これらは他
の貴族女性の作品とも通底する紫式部の思考の基底にある言葉なのである。同時
にここに物語と日記における接続の回路の一端を見出すこともできよう。

「何とはなくて、ただかやうに月をも花をもおなじ心にもてあそび、はかなき
世のありさまを聞えあはせてなむ過ぐさまほしき」と、いとなつかしきさまし
て語らひきこえ給へば

(中君は)行かふ時時にしたがひ、花鳥の色をも音をも、おなじ心に起き臥し
見つつ、はかなきことをも本末をとりて言ひかはし、心ぼそき世のうさもつら
さも、うち語らひあはせ聞こえしにこそ、慰む方もありしか、

(中君は)思ふ心をもおなじ心になつかしく言ひあはすべき人のなきままには、
故姫君(大君)を思出で聞え給はぬをりなし。

これらの表現は才気とともに静かに自己の思いを分かち合う關係を求めている。
同様に互いに共感で結ばれることを求める心情は『和泉式部日記』の女と宮にも窺
える。

(女)「帰りぬるにやあらん。いぎたなしとおぼされぬるにこそ、もの思はぬさ
まなれ。同じ心にまだねざりける人かな、たれならん」と思ふ。(42ページ)

(注16)

近藤みゆきは「同じ心」はこの場面から日記後半にかけて、(論者注 女と宮)
二人の絆を象徴する言葉となっていく。(43ページ脚注七)と指摘している。

(宮)もとよりかかる歩きにつきなき身なればにや、人もなき所について居など

もせず、行ひなどするにだに、ただひとりあれば、同じ心に物語聞こえてあら
ば、なぐさむことやある、と思ふなり(51ページ)
またの日の、まだつとめて、霜のいと白きに、(宮)「ただ今のほどはいかが」
とあれば、

(女)おきながら明かせる霜の朝こそまされるものは世になかりけれ
など聞こえかはす。例の、あはれなることも書かせ給ひて、

(宮)われひとり思ふ思ひはかひもなし同じ心に君もあらなん(71ページ)
女と宮とが互いに切なる結びつきを求めてゆく姿がそこに見られる。

「かたみに」「同じ心に」等の言葉に示されるような情緒的な關係は男女を問わず
求められるようになり、やがてそれは日常の心のふれあいの要件ともなる。『更級日
記』にもそうした傾向は著しい。

語らふ人どち、局のへだてなる遣戸を開け合はせて、物語などし、暮らす日、
また語らふ人の上にもしたまふを、たびたび呼びおろすに(80ページ)

うらうらとのどかなる宮にて、同じ心なる人三人ばかり、物語などして、まか
でてまたの日、つれづれなるままに、恋しう思ひ出でらるれば(100ページ)
同じ心に、かやうに言ひかはし、世の中の憂きもつらきもをかしきも、かたみ
に言ひ語らふ人、筑前に下りて後(101ページ)

「宮仕へ」には消極的ながら、やはり女房どうしが語り合いつつ互いをいたわり
合っている。前後するが『相模集』にも女房どうしがわびしさを互いに分かち合う
ように

常にしもあらぬ女どち、九月ばかりの夜あひて、よろづのものがたりする
に、この人も年ごろの人に忘られてそのなげかしさ言ひ、我も「常よりこ
とに思ふ事ありかし」など語り合はするをりしも、風吹くをりにありしか
ば

209 a 我もこひきみもしのぶに秋の夜は
思ひ入りたるにや、ものも言はねば

b かたみに風のおとぞ身にしむ

とあり、さらに時期を下って『四条宮下野集』に至ると、それが共感自体よりもむ
しろ風流事に傾いてゆくさまが見て取れる。

隆綱の中将、「月の明き夜は、夜一夜なむ見る」とあるに、夜中ばかりに初雪は降りながら、月の明きがおかし。「同じ心にあらむや」と思ふに、「見るとありし、まことか」と心みむとて

149月をこそめづらし気なく思とも夜半の初雪ふると知らずや^(一)

『出羽弁集』74番詞書も右と同趣旨である。

かやうのことどもも、同じ心に心ゆきて言ひ合はせなしたまふ宮亮(藤原兼房)、七日のこと過ぐしてと思ひつるも、かくすさまじくなりぬれば^(二)

これらの例はむしろ形骸化してゆく美意識の結果とも受け取られかねないが、景物を契機とした語らいは交流の形式を用いながらそこに深い思いを注ぐのに都合がよい。それゆえ次の時代の(個)の嗜みにも受け継がれてゆくのであろう。

結語

これまで注目されてきた誇らかで快活な談笑とは異なる、むしろ穏やかに心を通わす語らいについて『枕草子』を中心とする諸作品をたどってきた。中宮定子の御前での清少納言の活躍と朗らかな談笑は確かに栄えあるもの脚光を浴びる出来事ではあるが、交流の文芸の上ではそれがすべてではない。女房たちは世のはかなさの認識のもと語らいによって結びついていることが多かった。

しめやかなる夕暮れに、宰相の君と二人、物語してあたるに、殿の三位の君、簾のつま引き上げてお給ふ。年のほどよりは、いとおとなしく、心にくきさまして、「人はなほ、心ばへこそ難きものなめれ」など、世の物語しめじめとしておはするけはひ、幼しと人のあなづり聞こゆるこそ悪しけれど、恥づかしげに見ゆ。うちとけぬほどにて、「多かる野辺に」とうち誦じて立ち給ひにし様こそ、物語にほめたる男の心地しはべりしか。(『紫式部日記』15～16ページ)

しめやかな夕暮れの女房の語らいに一人貴顕(頼通)が加わり、「世の物語」へと話が深まり、あるいは共感の輪が広がる。それも雪の日のしめやかな語らいの場に才気ある言葉が添えられることで活気づく有様を表現した『枕草子』「雪のいと高う降りたるを」の章段284段と同様に、前述の『枕草子』176段のような「同じ心」を大切にする人々によって育まれたものであろう。語らいは、華やかさよりもその心寄せ合う近さ・しみじみとした情趣ゆえに中宮彰子の御前等においても同様

なあり方で支持・共有され、そこに集う貴紳を含む女房達の慎み深い、あるいは節度ある日常を形づくり、各々の心を結び合わせるようになるのであろう。

『枕草子』の引用はすべて石田穰二訳注 新版『枕草子』上・下巻 角川ソフィア文庫 昭和54・8、55・4 に拠った。

注

(1) たとえば『枕草子』「世の中に、なほいと心憂きものは、人にくまれむ」とこそあるべけれ。」の章段252段には「自然に、宮仕へ所にも、親、はらからの中にも、思はるる、思はれぬがあるぞ、いとわびしきや」という表現もみられ、逆に「親にも、君にも、すべてうちかたらふ人にも、人に思はれむばかり、めでたきことはあらじ」とも述べられている。また、「御前にて、人々とも、また、ものおほせらるるついでなどにも「世の中の腹立たしう、むつかしう、片時あるべきこちもせで、ただ、いづちもいづちも行きもしなばやと思ふに(以下略)」の章段262段も注目され、「心から思ひ乱ることありて、里にあるころ」とも述べられている。「清涼殿の丑寅の隅」の章段20段や「雪のいと高う降りたるを」の章段284段を担うのはいずれもそうした体験を持つ女房達ではないであろうか。『紫式部集』での夫の死去による落胆もやはり同様な体験であろう。

(2) 『枕草子』の場合で言えば、野村精一「宮廷文学としての枕草子」『源氏物語の創造』増訂版 桜楓社 昭和44・9(論文の初出は昭和32・6)は『枕草子』を「歌語り」と関連付けている。また、今井源衛「枕草子の本質」『国文学解釈と鑑賞』昭和39・11も「枕草子の斬新さは、清少納言自身の中に、多分に巢喰っていた歌語りの発想や形式を、自己一個の随想記述という点から、全体として、それを乗り越えている所にある。」と述べている。さらに三田村雅子「歌語りからの離脱——ウタの空洞化——」『枕草子表現の論理』有精堂 平成7・2 という論も「歌語りからの」とある以上、前掲論文同様「歌語り」の存在を前提としてのみ成立する見解である。それらの論の前提としての平安時代における「歌語り」の存在を提唱したのは益田勝実「歌語りの世界」『季刊国文』第4号 昭和28・3 等である。

(3) 益田勝実「歌物語の方法」『説話文学と絵巻』三一書房 昭和35・2 まで

た、前掲益田勝実「歌語りの世界」は厳密な意味での「歌語り」という鍵語の用例を1例しか提示していない。益田勝実「歌物語の方法」も含めて益田説を検証した論に高橋正治『大和物語』塙書房 昭和37・10、清水好子「歌語り」の実際 関根慶子博士頌賀会編『平安文学論集』風間書房 平成4・10 がある。それらによると確実な「歌語り」の用例は紫式部関係の『源氏物語』3例、『紫式部集』1例しか見いだせず、時代もそれ以上遡れない。「歌語り」がそうした歴史的な言葉である以上、鍵語ではなく術語である（「歌語り」の、時代を度外視した広範な適用は概念の混乱を引き起こすと考える。

なお、「歌語り」について益田勝実が援用している、池田龜鑑『物語文学』（日本文学教養講座VI）至文堂 昭和26・4 は『伊勢物語』が「和歌に關する打聞、うたがたりなどの和歌的説話とは、少し性格を異にしている」とし、一方の『大和物語』を「歌に關する噂とか、伝説とかのいわゆる「打聞」をあつめている」「和歌的説話集」として「歌語り」の存在を認めているが、その根拠は提示していない。「打聞き」についても渡辺仁史「打聞き」についての覚書——『枕草子』を起点として——『一関工業高等専門学校研究紀要』第50号 平成27・12 で指摘したように、『枕草子』より前の作品には用例がなく、以降の用例も「撰集」等の和歌の集成に接近してゆく。それゆえ（「歌語り」と同様（「打聞き」という概念の適用にも慎重であるべきであろう。

また、同じく益田勝実が援用する阪倉篤義「歌物語の文章——「なむ」の係り結びをめぐって——」『国語国文』昭和28・6 は宮坂和江「係結の表現価値——物語文章論より見たる——」『国語と国文学』昭和27・2 の指摘をふまえて「なむ」の使用頻度の高さが歌物語の指標であるとするが、そうした観点からすれば「なむ」と「ぞ」との使用比率が逆転する『平中物語』は表面上同様な形態の『伊勢物語』『大和物語』とは一線を画することになる。『枕草子』に至っては「なむ」の用例が少なく、「歌語り」との関係の指摘には疑義が生じることになる。

前掲清水好子「歌語り」の実際」の指摘した例で次のように厳密な意味での「歌語り」の語がなく「歌語り」としての認定を躊躇する例もある。

式部卿の宮の姫君に朝顔たてまつり給し歌などを、すこしほをゆがめて

語るも聞こゆ。くつろぎがましく歌誦しがちにもあるかな、なを見おとりはしなんかし、とおぼす。『源氏物語』「帚木」巻 鈴木日出男他校注 新日本古典文学大系『源氏物語』一 岩波書店 平成5・1 63ページ 表記を一部改めた。）

この例では述べ方として「歌誦しがち」とあり、以下も否定的な受け止め方になっている。清水好子が同じく提示する『小右記』寛仁二年十月十六日の条でも藤原道長の「此世乎は我世とそ思望月乃」の和歌に対して「満座只可誦此御哥」（東京大学史料編纂所編纂 大日本古記録『小右記』五 岩波書店 昭和44・8）とある。これも藤原実資の苦肉の策であろう。また、『源氏物語』の近江君の例でも「おかしからぬ歌語り」に対して「残り思はせ、本末おしみたるさまにて、うち誦じたるは」ともある。（もちろん和歌を「語る」「誦す」の他に「よむ」や「歌うたふ」「言ふ」の例もある。『枕草子』「二月、官の司に」の章段128段参照。）これも述べ方に関わるのであるが「深き筋思ひ得ぬほどの」とあり、こちらも「すきずきしき歌語り」、「はかなくよみ給ける歌語り」「あやしき歌語り」と同様、「歌語り」の意義を重視する扱いは必ずしもなっていない。

(4) 鈴木日出男他校注『源氏物語』「賢木」巻 新日本古典文学大系『源氏物語』一 岩波書店 平成5・1 371ページ 表記を一部改めた。

(5) 和歌の用例については鈴木宏子「語らへばなぐさむこともあるものを——和泉式部の表現——」『千葉大学教育学部研究紀要』第52巻 平成16・

2 参照 鈴木宏子は「和泉式部は「語らふ」という行為を、恋のみに限定されない、人間どうしの共感に満ちた関係の意で用いていると言えよう。」と指摘している。共感のあり方についてはすでに視点の融合、連帯感として木村正中「和泉式部日記の特質」『日本文学』昭和38・2、清水文雄「和泉式部」『王朝女流文学史』古川書房 昭和47・5 等にも指摘されている。

(6) 「賢木」巻で「かたみ」が繰り返されることは阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳 日本古典文学全集『源氏物語』二 小学館 昭和47・1 116ページ に指摘があり「二人の親密な関係を語る。」とされる。私的親密さとは『源氏物語』で薫の弁尼への「はかなく詠み給ける歌語り」（『源氏物語』「宿木」巻 今西祐一郎校注 新日本古典文学大系『源氏物語』五 岩波書店 平成9・3 89ページ）も薫の「まめやかなる事どもを語らひ給。」こ

とから導き出されるし、「人のあやしき歌語りするを聞きて」(『紫式部集』山本利達校注 新潮日本古典集成『紫式部日記・紫式部集』新潮社 昭和55・2)も分明ではない点もあるが私的交流であろう。

- (7) 高橋正治他校注・訳 新編日本古典文学全集『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』小学館 平成6・12 『大和物語』で「語らふ」関連の語は他の章段にも「右京の大夫よびいでて、語らひて」(39段)「思ふことをいひかはしけり」(62段)「よろづのことをいひかはしけり」(122段)「ものなどいひかはしけり」(166段)「みそかに語らひけり」(168段)の用例がある。また、物語的歌集と言われる『後撰和歌集』(片桐洋一校注 新日本古典文学大系『後撰和歌集』岩波書店 平成2・4)の詞書にも「年を経て語らふ人のつれなくのみ侍ければ、うつろひたる菊につけてつかはしける」(963)、「世中をとかく思ひわづらひ侍ける程に、女ともだちなる人「猶、我が言はん事につきね」と語らひ侍ければ」(1154)、「女ともだちの常に言ひかはしけるを、ひさしく訪れざりければ、十月許に、「あだ人の思ふと言ひし事の葉は」といふ古言を言ひかはしたりければ、竹の葉に書きつけてつかはしける」(1272)の用例がある。

(8) 三角洋一「作り物語の裾野」『日本文学』第36巻2号 昭和62・2

(9) 川村裕子訳注 新版『蜻蛉日記』 角川ソフィア文庫 平成15・10 康保元年

(10) 天野紀代子・園明美・山崎和子著『大斎院前の御集全釈』風間書房 平成21・5

(11) 本稿では「歌語り」等の基層を主として追究するが、これらの「語らひ」等の交流の語群から外れるもので「歌」が関連する用例をさらにいくつか指摘できる。管見では「さて、その歌、語れ。」(『職の御曹司におはしますころ』の章段83段)、「ことによしともおぼえぬわが歌を人に語りて」(『かたはらいたきもの』の章段92段)、「をかしと思ふ歌を、草子などに書いておきたるに」(『をかしと思ふ歌を』の章段294段)がある。『枕草子』の前掲二重傍線で示した用例を含めてこれらの用例では「語れ」「語りて」「書いて」と一方向的であるが、双方向性を意識し始めると「語り聞く」「言ひかはし」「打聞などに書き入れ」「語りあはせ」という行為となり、それがいわゆる(歌語り)とも関わるのかもしれない。ともあれ『枕草子』で「歌」が他の言語

行為と密接に関わり書きとめられていることも語らいの語群に注目することを確認できる。

- (12) 山本淳子訳注『紫式部日記』角川ソフィア文庫 平成22・8 以下、『紫式部日記』の引用は同書に拠る。『紫式部集』(山本利達校注 新潮日本古典集成『紫式部日記 紫式部集』新潮社 昭和55・2)にも「ほのかに語らひける人に」(92)、「少将の君を夜な夜なあひつつ語らふを聞きて」(95)とある。

(13) 『源氏物語』「総角」巻 鈴木日出男他校注 新日本古典文学大系『源氏物語』四 岩波書店 平成8・3 393ページ 表記を一部改めた。

(14) 『源氏物語』「早蕨」巻 今西祐一郎他校注 新日本古典文学大系『源氏物語』五 岩波書店 平成9・3 4ページ 表記を一部改めた。

(15) 『源氏物語』「宿木」巻 今西祐一郎他校注 新日本古典文学大系『源氏物語』五 岩波書店 平成9・3 78ページ 表記を一部改めた。

(16) 近藤みゆき訳注『和泉式部日記』角川ソフィア文庫 平成15・12 『和泉式部日記』の引用は同書に拠る。

(17) 原岡文字訳注『更級日記』角川ソフィア文庫 平成15・12 『更級日記』の引用は同書に拠る。

(18) 武内はる恵・林マリヤ・吉田ミズズ著『相模集全釈』風間書房 平成3・12

(19) 犬養廉校注『四条宮下野集』 新日本古典文学大系『平安私歌集』岩波書店 平成6・12

(20) 久保木哲夫 新注和歌文学叢書『出羽弁集新注』青簡舎 平成22・4

(二〇一九年九月二七日受理)